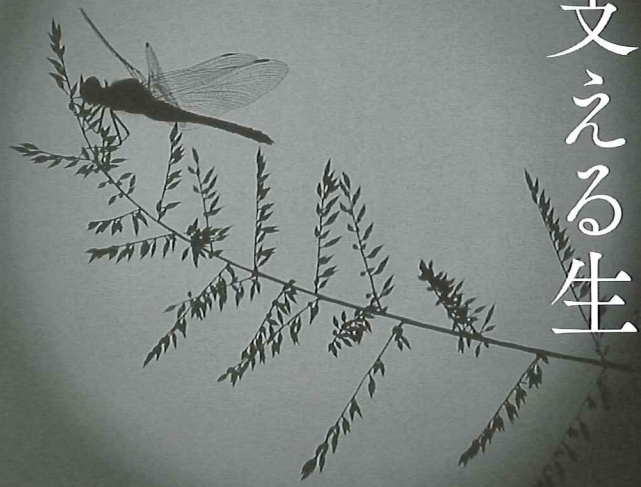


死者が支える生

宮坂静生

miyasaka shizuo



本年度の受賞作品にこんな二句があった。

魚島や祠に暗き絵らふそく 深川淑枝
稲妻や潮の浸せる鯨墓

初めの句の「魚島」は鯛などの魚が産卵のためにどつと集まり、島ができたように海が盛り上がる瀬戸内の春の光景をいう。近くにある島の洞窟では海での死者供養の絵蠟燭が灯されている。生者と死者がごくふつうに助

三・一一以後何が変わったか。死や死者に
関してちよつと構えないで、話すことができ
るようになった。連日、新聞の一隅に東日本

大震災の死亡者一五八四七人、行方不明者三
三〇六人（二月十日付）と出るのを見ながら、
終戦直後、ラジオで毎日「訪ね人」の時間が
あったことを思い出す。戦後は戦中の夥しい
戦死者や行方不明者がありながら、死や死者
を語ることは少なかった。生者の陰で死者は
縮こまり、死はやはりタブー視されてきたの

ではないか。宗教者はともかく、一般にはそ
んな気がする。

東日本大震災やそれに引き続く「フクシ
マ」の原発事故による地球汚染、その中での
生存の問題は、みちのくの被災者でなくとも、
この列島に住む私たちに共有された死生観と
して、この世は生者と死者とがたがいに支え
合って生きていくものだというあたりまえの
ことを実感させることになった。

俳人である私が関わったある総合俳句誌の

け合っている。亡くなった人はそれきりではない。豊漁を予告する産卵を支えるのも死者の役廻りなのではないか。

次の句の「鯨墓」とは捕獲した鯨供養のためのものである。高知県室戸岬の寺には鯨供養位牌がある。鯨ではなく鮭であるが、山形県遊佐町には鮭供養塔、新潟県山北町の海岸に立てられる鮭供養卒塔婆も知られている。鮭を千匹捕獲したごとに一本の卒塔婆を立てるといふもの。

掲句の鯨墓がある汀は夜の満潮時には海水が押し寄せる。稲妻は稲の稔りを約束させるものであるが、ここは豊漁へのシグナル。鯨が獲れますようにと供養の墓が作られた。漁村では海の漂流物をたいせつにする信仰がある。漂流死体でも恵比寿様といって豊漁を齋すものだという。恵比寿大黒と併称される恵比寿は海の漂流神、大黒は田の稔りの神と世を二分して豊かさへの守り神。かなしみの最中にあるみちのくであるが、大震災の津波に呑まれた死者もやがて恵比寿様として祀られる日が来ることを願わずにはいられない。

大震災後七カ月近い昨年(二〇一一)の十月八日、岩手県陸前高田市へ入った。同地に勤め、地理に詳しい友人に案内をお願いした。大震災の被害は同市だけで死者一五〇六人、行方不明者六四三人、合わせて二一四九人(昨年五月三十一日現在)と犠牲者が多い

地である。震災翌日の上空からの航空写真を見たのに比べ、半年後の状況は、水も引き幹線道路は車で通ることもでき、不便はなかったが、瓦礫と化した臨海一帯にイチ、私は、一切発することばが見つからない。しばらくして、瓦礫の間から潮焼けした翅の蜻蛉を拾い上げた。炭化寸前でありながらいのちを保っている。その強靱さに打たれ、目頭が熱くなった。

かつてプロレタリアの詩人中野重治が言った「お前は歌ふな／お前は赤まゝの花やとんぼの羽根を歌ふな／風のさゝやきや女の髪の毛の匂ひを歌ふな／すべてのひよわなもの／すべてのうそうそしたもの／すべての物憂げなもの／もつぱら正直のところを／腹の足しになるところを／胸先きを突き上げてくるぎりぎりのところを歌へ」(「歌」)との詩を思い浮かべた。重治の詩は一面の真理を突いている。が、重治の見方はあまりにも人間中心。赤ままやとんぼの羽根を「ひよわなもの」「うそうそしたもの」「物憂げなもの」と見下しているのではないか。人間の意志で、そのように決め込み、振じ伏せているように私には読める。赤ままやとんぼの羽根はひよわでも、うそうそしたもの、物憂げなものでもない。強靱な自然の耀きをもつて、われわれに迫る

親兄弟を津波に奪われた気仙地域の人たち

を直ちに救う力にはならないが、それらの人たちがやがて立ち上がるときに、無言の声を掛け、励ましてくれるのは、潮焼けしながらも生きのびている蜻蛉なのではないか。

三・一一以後、私たちの中で自然を深く見つめようとする思いが以前よりも強くなっている。それは細やかなことであってもこれからの人間社会への対し方としてはだいいじな変化を齋すものである。

かつて私が、アイヌ集落でおばあさんから聞き、感動したエピソードがある。子どもが囲炉裏の上の燻製を作る棚におでこをぶつけ泣いたときに、ぶつけた棚の木の方をさすり「いい、いい、治る、治る」と言う。ぶつけた子どもが痛いのは当然、もう一方の棚の木も痛いだろうと摩る。そうすることで子どもは痛みが去ると同時に、大事なことをしぜんに身につける。同じことを宮沢賢治も問題にしていると賢治研究家から教えられるが、「柱に頭をぶつけたときに、自分の頭の痛みではなく、柱の痛みを感じるができるか」は東日本大震災の体験をこの列島の人々が長い目でしっかりと受け止めていくのに、アイヌのおばあさんから教えられる考え方ではないかと思う。

(みやさか しずお・信州大学名誉教授・俳人著書に「語りかける季語 ゆるやかな日本」岩波書店)